大学生の居場所に関する調査

ー自由記述法を用いてー

○飯田沙依亜¹・甲村和三²

(¹名古屋大学大学院環境学研究科・²愛知工業大学基礎教育センター)

キーワード：居場所、大学生活

The factors contributing to students' comfort at college

Saea IIDA¹, Kazumi KOHMURA²

(¹Graduate School of Environmental Studies, Nagoya Univ., ²Aichi Institute of Technology)

Key Words: comfort, college life

目 的

「居場所」とは、人のいる空間的な意味での場所である。それを心の拠り所、あるいは占有感の感じられる場所、存在を実感できる場所、といった心理的意味で、相応しいところに、自分らしくいられるという実感をここでは「居場所感」とする。人はさまざまな場面において自信を持って行動したり、水を得た魚のように動き回ることがある一方で、ときにその場面に居心地の悪さを感じることもある。例えば、場違いな場面で何をしたらいいのか戸惑ったり、自分という存在そのものがその場に相応しくないように感じたり、時にはいつもの生活空間においてすらそのように感じたりすることもある。場所や場面に対する否定的感情は違和感を強く覚えたり、疎外感に苛まれたりする。周囲の雰囲気になじめなかったり、会話の流れにうまく乗れなかったりするようなとき、こうした感情を強く経験した人も多いであろう。このような居場所感のなさに関わりを持つ若者(中学生や高校生・大学生など)を対象とするいくつかの調査が、既に試みられている(例えば、杉本・庄司, 2006、斎藤, 2007、石本, 2008 など)。本研究は、これらの先行研究を参考にしながら、大学生のキャンパスライフへの適応のプロセスを検討することが主たる目的である。また「居場所感」は、もともと個人の感情である。予め準備した一般的な尺度で明らかにできる部分がある一方で、個別的な(個人的な)感情面まで顕示化することは難しい。そこで本研究では回答者が自分の言葉で表現できるいわゆる自由記述法により、改めて「大学生活への適応(居場所感がある)」を感じる心理的要因(どういう状況にあるとき、大学に自分の居場所を感じるか)について調べてみることにした。これにより、キャンパスライフに関わるかなり個別の適応条件をより明らかにすることが期待されるとともに、記載された事項に関連性に主眼を置いた質的分析をすることにより、キャンパスライフの適応感を規定する一般的要因抽出とその要因の意味を検討することが可能と考える。

方 法

回答者：1～4年次の男女大学生(有効回答者 294人)。講義科目の関係で1, 2年生が大半である。

調査実施時期：平成23年10～11月 講義終了後の時間を利用して実施

質問紙：「大学生活において居場所感があると感じる心理的要因(どういう状況にあるとき、大学に自分の居場所を感じるか)について思いつく限り箇条書きして下さい」「家庭に居場所があると感じる心理的要因(どういう状況にあるとき、家庭に自分の居場所を感じるか)について思いつく限り箇条書きして下さい」と記した質問紙を用いる。従って、一人でも多数の回答をした者もいれば、わずかな回答の者もいることになる。無記入あるいは意味不明の回答は無効とした。

結 果

結果の整理：書き込まれた多数の項目群をその関連性から「ヒト」「モノ」「コト」に大分類し、個別の回答項目はほとんど類似しているものは1つの項目として累数をまとめるが、似て非なる回答はなるべく独立させ、意味の検討に余地を残すように努めた。分類項目とした「ヒト」は友人関係、教職員との関係、先輩や後輩との関係に関わりを持つ内容項目群である。「モノ」は、まさに「物」に関わる項目群である。机や椅子、黒板の類である。「コト」は「事」に関わる内容項目群であり、大学祭を初めとする行事などに関わる項目群である。「ヒト」: 全体の84.72%が友人を中心とする人間関係に関わることが知られた。このことは学生たちのキャンパスライフにおける居心地の良さは、約8割の比率で友だちを中心とする人間関係に規定されているといえることができる。

「モノ」: 名簿に記載された自分の名前、学生証を持ち、書類に書かれた学籍番号を見るなど、学生たちは目に見えるモノを通して、そのモノに対して思い入れ(感情移入)、そこに居る資格のようなものを自分が持ち合わせている実感を味わっていることなどが窺われる。

「コト」: 「コト」をきっかけに、友人関係、師弟関係の形成に関わる内容がほとんどである。日常的な挨拶、本来の使命である学業、大学祭などの行事に参加する、クラブ・サークルなどの課外活動に参加することなどは、新たな人間関係を確立するのに恰好の場面であろう。

考 察

大学生のキャンパスライフが楽しいものになるかどうかは、究極的にはキャンパス内の人間関係、中でも友人関係に強く規定されているといえよう。発達心理学では、大学生が中心の青年期後期の発達課題として、異性を含めた同年齢の洗練された親しい人間関係の発展などを挙げることが多い(例えば Havighurst, R.J.)。青年期の友人関係は、数は少ないながらも親近性はかなり強い。この友人関係を通して、青年は社会化が昂進されると考えられる。いわば人づきあいを学び、それを通して自分形成を図っており、うまくいけば不安や危機の多いこの時期の情緒的安定を図っていると思われる。

引用文献

- 石本雄真 2008 居場所感に関連する大学生の生活の一場面 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 2 (No. 1), 1-6.
- 斎藤富由紀 2007 大学生および高校生における心理的居場所感尺度作成の試み 千里金欄大学紀要 73-84.
- 杉本希映・庄司一子 2006 中学生の「居場所環境」と学校適応との関連に関する研究 学校心理学研究 6 (No. 1), 31-39.